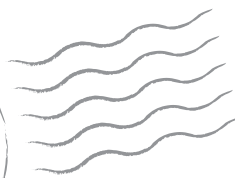


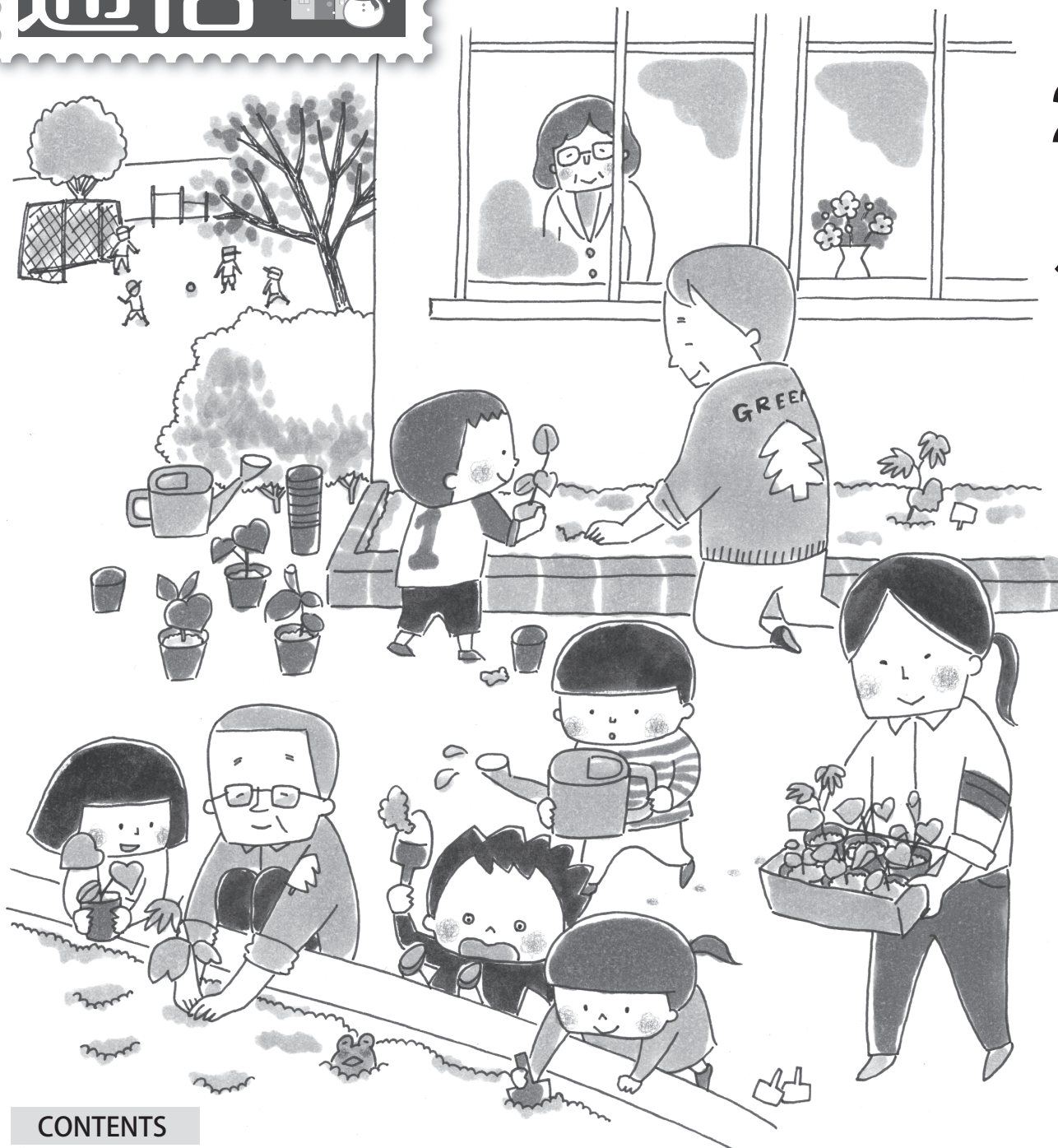
わおん 通信



2019
春号
vol.32



特集 COP24開催（パリ協定実施に向けた具体策）



CONTENTS

P2 — P3

県内地域の取組

地産地消からはじめる安心な食事
里山を通じて自然と向き合っていく
どうなる？あなたと私の10年後
年に一度の推進員の集いと学び

推進員 精ちゃんの
ああしたら こうなった 1 (全6回)

P4 — P5

COP24開催

～パリ協定実施に向けた具体策～

P6 県情報

気候変動・適応 (その2)
～緩和と適応は地球温暖化対策の両輪～

P7

推進員さん訪問記⑳
なるほど ザ・ワード

P8

INFORMATION

地産地消からはじめる 安心な食事

2019年1月27日
エシカル消費「オーガニック料理教室」

【伊都・橋本地球温暖化対策協議会】



最近よく聞かれる環境保全や社会貢献につながる「エシカル」という言葉、その一環でもある有機野菜や調味料を使った「オーガニック料理教室」を開催、親子を含む19人

が参加しました。この料理教室は毎年実施しており、今回で11回目となります。安心安全の食生活はもちろんです。地産地消で運搬による二酸化炭素の排出（フードマイレージ）削減や、化石燃料を原料とする農薬や化学肥料を使わないことが、地球温暖化防止につながります。今年、「あぶり鮎の釜めし」「菊芋と大根のシャキシャキサラダ」「コクありポトフ」「チョコもち」の4種類の料理をみんなで楽しく作りました。参加者から、「おいしかった。オーガニックは安心して食べられます。食材が少し高いが取り入れていきたい。」との意見も聞かれました。今後とも、地



道に継続して実施し、少しでもこの輪を広げていきたいと思えます。

（推進員 黒井成男）

里山を通じて自然と 向き合っていく

2019年1月13日 橋本市民会館
和歌山県の人と自然をつなぐシンポジウム

【和歌山県】

「生物多様性戦略」を多くの県民に知ってもらおうと、和歌山県が5回シリーズで展開するシンポジウムが橋本市で開催されました。3回目となる今回は「未来へつなごうふるさとの自然」をテーマに講演や研究発表、パネルディスカッションなどが行われました。シンポジウムでは、里山を通じて人と自然との関わりについて追いつける写真家の今森光彦（いまもり・みつ



ひこ）さんが『里山の自然をみつめて』と題して講演しました。続いて、地元橋本市柱本で子供たちを中心に活動している「はしもと里山学校いきもの係」5人によるスズメバチの生態や、いきもの係の活動成果についての発表がありました。その後、「和歌山の里地里山」をテーマにパネルディスカッションも行われ、人の営みとともに育まれてきた自然について、意見交換がされました。ロビーでは、はしもと里山学校いきもの係が採集したトンボや蝶の昆虫展があり、「昆虫少年」を名乗る仁坂知事との情報交換も行われ、実りある一日となりました。（推進員 黒井成男）

どうなる？ あなたと私の10年後

2019年2月2日
地球塾Vol.7
～仲間づくりが地球を救う～
紀の川市粉河 山崎邸

【地球塾プロジェクト】

私たちの未来に立ちほだかる気候変動による危機。これにまつわるとてもない問題の山。みんなはどう思っているのだろうか？何か対策しているのかな？そもそも解決策はあるのか？そんな漠然とした思いを抱える者同士、ともかく集まって語り合おうと企画された今回の地球塾。テーマは「どうなる？あなたと私の10年後」。会場は紀の川市粉河にある築約100年の『山崎邸』。大きな座敷の周りいっぱい敷いた座布団に座ったのは、幼子から熟年まで総勢40人余り。最初に、紀ノ川農協の宇田篤弘組合長から県内農業の実態と課題の報告。続いて、横浜市から那智勝浦町色川に1ターニンして12年目



の外山麻子さんから農的暮らしの中で、楽しみや地域が抱える課題などのお話。こちらから参加者全員の自己紹介を兼ねたショートトーク。食と農に関心が高い参加者が多い中、災害NGO結 代表の前原土武(トム)さんからは、防災や災害支援など気候変動と関係の深い話題提供がありました。終了後も話は尽きず、会場となった山崎家の御先祖様たちの遺影が見守る座敷は、さながら「親戚の集まり」のような雰囲気です。そのような会場に併設されているカフェでは地元産の有機野菜を使った特別ランチの提供もあり、参加者からは「こういった機会をまたぜひ」といった声が多く聞かれました。

年に一度の推進員の集いと学び

2019年2月3日
和歌山県地球温暖化防止活動推進員総会
和歌山市南コミュニティセンター

[和歌山県センター]

今年度のテーマは「相手に伝わる話し方」と「SDGsの二本立て」。午前の部「話し方講座」では、子育て後の再就職支援活動を行っているNPO法人代表の上田茜さんによる「世代間の物事の捉え方の違い」に続いて、カラーセラピストの尾高りほさんからは「色を選択することから始まるコミュニケーション」についてのお話がありました。「世代間ギャップの現状」と「傾聴を意識した会話のコツ」を聞いたあと、全員でカラーセラピーを実施。色を選ぶことで自身の内面や性格などに気付くことができ、相手への声のかけ方や聞き方の工夫を各々で実感。推進員活動はもとより日常のコミュニケーションにも活かせる内容でした。



午後の部は「ゲームを通じて体験的に学ぶ」と題して「2030SDGsカードゲーム」専門ファシリテーター平井研さんの進行により、参加者全員でカードゲームを体験。国連が掲げた2030年までのゴールを目指す17項目と169のターゲットへの理解は非常に時間がかかりますが、このゲームはSDGs全体を網羅的かつ直感的に理解できるように設計されています。白熱したゲームの後で振り返りを行い推進員として自分に何ができるのか、またこれからの目標、やってみたいことなどを各々が発表。様々な課題を横断的に捉えて具体的なアイデアを共有し合えた一日となりました。

推進員 精ちゃんの ああしたら こうなった 6回シリーズ

海の向こうで「持続可能な暮らしづくり」奮闘記 ①

〈なぜ、フィジーに?〉

私は2016年3月から、2年間、JICA（日本国際協力機構）による海外シニアボランティアとして、南太平洋の島国フィジーで廃棄物処理の仕事をしていました。約40年前、私が大学生であったころ、海外ボランティアに関心があり、このJICAの青年海外協力隊の説明会



アパートから見える夕日

に行ったことがありますが、その当時は、自分には途上国で役に立つ技術や知識が何もないことを知り、断念をしたことがありました。長年勤めた市役所の退職を前にして今こそ自分のやりたいことを叶える時だと思

い、応募をして、運よくフィジーに行くことになりました。そして、職種は市役所でいくつか経験をした中で、自分自身のライフワークだと思っていた環境の仕事を選びました。英語圏では3か国から廃棄物処理の募集があり、フィジーを第1希望に選びました。なぜなら、フィジーには行ったことがなかったのですが、美しい島国のイメージを持っていたからです。



首都スバの市役所

このコーナーでは推進員の方々のCO2削減活動を募集しています。ぜひ、「私はこんな活動をしました」という声をお寄せください。

COP24開催 ～パリ協定実施に向けた具体策～



2018年12月2日～15日
カトヴィツェ（ポーランド）

EU最大の石炭企業の拠点に位置する街カトヴィツェで、COP24（第24回、国連気候変動枠組条約締約国会議）が開催されました。

開催都市のカトヴィツェのパビリオンでは、主要産業であり課題の多い石炭採掘業をポジティブに転換する工夫を、ブース全体で打ち出した展示が目まぐるしく見られました。

より一層のゴールに向けた会議の様子を見ていきましょう。

今回の話し合いは、2015年に合意されたパリ協定の具体的な方針づくりでした。

話し合いのポイントは大きく3つありました。

- ①パリ協定実施に向けた方針づくり
- ②タラノア対話（COP23設立）の総括
- ③途上国への資金的支援

①パリ協定実施に向けた方針づくり

これまで温室効果ガスを長期にわたり大量に排出しながら発展してきた先進国の主張と、途上国のルールが同じでは発展できないとする主張が対立していることはすでにご存じのとおりですが、それでは地球温暖化は抑えることができません。

パリ協定はその差も考慮して工夫されているのが特徴です。

今回の排出削減目標の実施に向けた具体的な方針として、途上国も「時間とともに先進国同様に国全体の排出削減・抑制目標へ向かうこと」（4条4項）とされ、発展段階と排出量に応じた削減義務と対策を引き受けることが想定されました。

しかし、削減目標の指標として用いられた1.5℃特別報告（※1）の受け止めについては、主要産油国のアメリカ、サウジアラビア、ロシア、クウェートなどが合意せず最後まで難航しました。それでも、途上国にも削減を課し、

困難な場合はその理由を説明し報告することで、全ての国に適用されることになりました。

つまり、先進国と途上国が共通のルールで温室効果ガスの削減に取り組むことが決まったのです。

国名	削減目標	削減基準年
中国	2030年までにGDP当たりのCO ₂ 排出量を2005年比で60-65%削減 ※2030年前後に、CO ₂ 排出量のピーク	2005年比
EU	2030年までに40%削減	1990年比
インド	GDP当たりのCO ₂ 排出量を2005年比で33-35%削減	2005年比
日本	2030年までに26%削減 ※2005年比では25.4%削減	2013年度比
ロシア	2030年までに70-75%に抑制	1990年比
アメリカ	2025年までに26-28%削減	2005年比

各国の温室効果ガス削減目標

②タラノア（※2）対話（COP23実施）の総括

現在までに各国が示した削減目標では、地球の平均気温の上昇を2℃未満に抑えるには至りません。さらなる目標の引き上げが求められる中で、現実とのギャップをどのようにして埋めていくかが大きな課題です。「タラノア対話」は、対立ではなく建設的な「対話」を通じて各国の取組強化のアイデアを出し合う場として今回も開催されました。そして、COP23とCOP24両議長による「タラノア行動宣言」が共同声明



カトヴィツェパビリオンの展示

として出されました。

今回のゴールは排出量削減の引き上げに「政治的なはずみ」をつけていくことでした。各国の閣僚レベル級の参加者の下、欧州諸国や島国などが排出削減のメッセージを求めましたが、ここでも先の主要産油国との間で対立。結果は単に「言及（テイクノート）」し、各国が目標を検討する際にはタラノア対話を「考慮する」という表現にとどまりました。

③途上国への資金的支援

「2020年までに年1,000億ドル」という途上国への資金的支援の総額目標が、2009年開催のCOP15で設定されていました。

COP24では、先進国全体でこの目標を達成する見込みであることが確認されました。

さらに、2020年以降の支援目標は、2025年の目標を設定し交渉を始めることがCOP21の決定案件でしたが、その交渉開始をいつにするかが決まっておらず、途上国が「できるだけ早く始めるべき」と主張していました。結果として、1,000億ドル／年以上の総額目標に関する交渉は2020年から始めることになりました。

先進国としては、資金の交渉はできるだけ避けて通りたいところですが、パリ協定の詳細ルールにおける先進国

の主張を実現していくためには、避けられない議題であり、途上国にある程度譲歩した結果となりました。

◆日本の役割と評価

①低炭素技術の提案（日本パビリオン）

これまでワークショップばかりだと言われていた日本パビリオンでは、今回、実質的な炭素削減につながる各種の技術に関する模型や、斬新で最新の製品の展示が国際的に評価されました。

●自然エネルギーを活用した水素技術

長崎県の五島列島で、雨水と風力発電の電力で水素を作り、貯蔵、運搬する技術が実証されました。燃料に水素を使う燃料電池船の建造と試験運行にも成功しました。パビリオンでは、この離島での脱炭素化モデルの100分の1模型が展示されました。

●洋上型／台風でも発電＝風力技術

「台風でも発電が可能な風力発電技術」として斬新な形状の「垂直軸型マグナス式風力発電機」が展示されました。

また、前述の離島での風力発電に用いられている浮体式洋上風力発電では「ハイブリッドスパー型」という、設備を支える材料にコンクリートと鋼を使った世界初の形式で、低コストで建造が可能。この形式は安定性も高く、2013年の設置以降、毎年襲来する台風にも耐え続けています。

●温室効果ガス観測衛星「いぶき」

2018年10月に打ち上げが成功した温室効果ガス観測技術衛星「いぶき2号」（GOSAT-2）は、JAXAと環境省、そして国立環境研究所の3機関で開発され2009年に打ち上げられた「いぶき」のミッションを引き継いだもの。地球の全大気中の二酸化炭素とメタンを宇宙から

継続して観測します。より高性能の観測センサーを搭載した、「いぶき2号」の観測は精度が高く、大都市単位などで人為的な起源の温室効果ガス排出量を計測することができます。この技術により、世界的に課題となっている温室効果ガス排出量の透明性の向上が期待できます。

関連記事「わおん通信・vol.11（2014年冬号）なるほど・ザ・ワード」参照

②「市場メカニズム」

パリ協定では「各国が削減目標の達成に向けて国同士が自主的に協力しあう場合の条件を定めること」が決められていました。これを受けてCOP24では、持続可能な発展の促進、透明性の確保、排出量と吸収量の算定などが論点でした。

この中で、日本が提案した「二重計上の防止方法」というCO₂の排出権取引に関する意見書をEU、AILAC（ブラジルを除くコロンビア等中南米諸国）、カナダ、オーストラリア、スイス、メキシコと共同で、会期中に提出。今回決まったパリ協定実施指針の透明性の枠組み（13条）に反映されました。

◆日本が存在感をアピールしたかった「市場メカニズム」主導

削減取引の透明性について一部の国から評価を得た日本。しかし会議では希薄な存在に終わりました。2030年までに26%削減する目標は、先進国としては消極的であり、信頼とチャンスの回復に気候変動対策への大胆な見直しが不可欠となりました。今年の2019年6月、大阪で開催されるG20では日本の具体的



パリ協定の実施ルールを採択したCOP24最終日の様子（提供・UNFCC/ジェームズ・ダウソン）

な対応に各国の目が注がれます。

◆求められる気候変動への「国民の関心と行動」

気候変動対策に日本の技術と知見は不可欠です。しかし、このような結果に終わったのはなぜでしょうか。それは気候変動に対する国民の関心の希薄さが要因のひとつではないでしょうか。一人ひとりの関心と行動がなければ、いくら具体的な削減目標を掲げたところで、世界からの評価を得ることはむずかしいでしょう。地球温暖化防止活動推進員の活動がますます重要になってきます。

◆今後の動き／情報

- 2019年5月には京都でIPCC総会が開催され、「温室効果ガスの算定方法の改良に関する報告書」が受諾される予定
- 2019年6月には、G20が大阪で開催
- 2019年6月15～16日には、G20閣僚会合のうち「持続可能な成長のためのエネルギー転換と地球環境に関する関係閣僚会合」が軽井沢で開催
- タラノアJAPAN（Facebookページ）

◆引用元

- http://www.nies.go.jp/social/topics_cop24.html（国立環境研究所）
- https://www.asahi.com/articles/photo/AS20181211002930.html
- http://copjapan.env.go.jp/cop/cop24/pavilion/
- https://www.bnet.jp/casa/（地球環境市民会議）

※1 1.5℃特別報告

世界の平均気温が産業革命前と比較して1.5℃上昇の場合の影響や、平均気温の上昇を1.5℃に抑えるための排出のシナリオを示したものです。195の政府が承認したこの報告書は、パリ協定の努力目標である1.5℃以下を検討するための科学的根拠となります。この報告書では、はじめて1.5℃の場合の影響が示されました。2℃ではなく1.5℃に抑える方が様々な面においてより安全

であることが明らかになりました。国連は全体として、気温上昇を2℃ではなく1.5℃に抑えることができれば、気候変動の影響を受ける人々が4億2,000万人減るとみています。
https://www.wwf.or.jp/activities/activity/3750.html
http://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounds/31408/

※2 タラノアとは

タラノアとは、COP23の議長国をつとめたフィジーの言葉で「包摂的、参加型、透明な対話プロセス」という意味です。「交渉」ではなく「対話」なので、穏やかな空気の下、2018年1月から継続されてきました。政府だけでなく、企業、自治体、研究機関、NGOなどが参加して実施されました。この「対話」を成功させ各国の温室効果ガスの削減目標を引き上げることが今回のCOP24の目標のひとつでもありました。

※3 子供たちのストライキ（グレタさん）

COP24では、スウェーデンの15歳の少女、グレタ・トゥーンベリさんがスピーチを行ないました。グレタさんは、大人たちに一刻も早く具体的な行動をと訴えるため、この夏、議会前で2週間の座り込みをし、世界の子供たちに影響を与えました。12月にはスイスでも千人の子供たちが、COP24直前にはオーストラリアで数千人の子供たちが学校を休んで気候変動への対策を求めるストライキを

行いました。多くの大人たちは、学校を休んでストライキとは何ごとかと、勉強はどうするの？と思われるかもしれません。しかしグレタさんは、座り込みをしている間も学校の課題はきちんとこなしていたそうです。そして徐々に友人たちや、子供連れの親、さらには学校の先生までもが参加し、ついにグレタさんは政治家とも話をする事ができ、その行動はスウェーデンの総選挙にも影響を与えること

になりました。彼女の真摯な言葉と行動は、ぜひ音声で。15歳の少女に叱られて考えたー 2019年、気候変動問題に「希望」はあるのか？（国立環境研究所 地球環境研究センター 江守正多氏）
https://news.yahoo.co.jp/byline/emoriseita/20190108-00110248/

気候変動・適応 (その2)

～緩和と適応は地球温暖化対策の両輪～

近畿地区の関係者が集まって、「気候変動適応近畿広域協議会」が設立されました。

- 「適応」というと、言葉は簡単ですが、実際には「農業、森林・林業、水産業」、「水環境・水資源」、「自然生態系」、「自然災害・沿岸域」、「健康」、「産業・経済活動」、「国民生活・都市生活」と、とても多くの分野が関係します。
- そのため、適応に関する取組については、これらの分野を担当する関係者が集まって、よってたかって議論し、それぞれが知恵を出しあって、より良い方策を作り上げ、そして実行していく必要があります。
- 「気候変動適応近畿広域協議会」は、そのために設立されました。そして、メンバーは非常に広い範囲にまたがっています。なお、メンバーには、和歌山県、和歌山県地球温暖化防止活動推進センターが入っています。

協議会の主な構成

◇府縣市

滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、**和歌山県**、京都市、大阪市、堺市、神戸市

◇国の機関

近畿農政局、近畿中国森林管理局、近畿経済産業局、近畿地方整備局、近畿運輸局、大阪管区气象台、近畿地方環境事務所

◇地域地球温暖化防止活動推進センター

滋賀県センター、京都府センター、大阪府センター、兵庫県センター、奈良県センター、**和歌山県センター**、大津市センター

◇地域気候変動適応センター

滋賀県気候変動適応センター

- 同じような協議会は、全国7ブロック（北海道、東北、関東、中部、近畿、中国四国、九州沖縄）にあり、それぞれの地域において、その地域に応じた適応策を検討していくこととなります。
- 「気候変動適応近畿広域協議会」の第1回目の会議は、平成31年2月1日に開催され、今後、以下に示す方針に基づき取組を進めることが決められました。

気候変動適応近畿広域協議会の取組方針

1. 気候変動適応に関する施策や取組などの情報交換・共有
2. 気候変動の影響に関する科学的知見や適応を推進する上での課題の整理
3. 地域の関係者間連携による各種取組推進
4. ステークホルダーへの適応の理解促進

- 適応策を進めていくうえでは、今までの活動・生活の中で培った、皆さん「ならでは」の経験が大事です。自分に何ができるのか、他人事ではなく、皆さんも一緒に考え、行動しましょう。

松っちゃんの

推進員さん^{ひよっこ}の訪問記^⑦



和歌山市 水流 徹浩 さん

「水流」と書いて「つる」と読みます。苗字の由来は南九州を流れる川内川（せんだいがわ）流域の地名「水流」から来ているといいますが、流は「る」と読めても「水」がなぜ「つ」になったかという、和歌山県の人やザ行をダ行で言ってしまうように鹿児島県の人やサ行が言いにくくて「つ」になってしまったと推察できるそうです。

和歌山市にお住まいの水流徹浩さんは第11期推進員で、和歌山市生まれの和歌山市育ち。家が食堂を営んでいたのでも外で遊ぶことが多く、田んぼや自然に親しんでいたといいます。和歌山大学（夜学）在学中に和歌山市役所に採用、営繕課や水道局、教育委員会にも出向していましたが、現在は企業局で保安管理に携わっています。

応募のきっかけは、イベントで知り合った第1期推進員の山一小百合さん（現在は大阪府に移住）の話が印象に残り、1年後に募集案内を見て興味が湧いたからといいます。講座ではエネルギー管理士の資格を持っていることから温暖化の現状等はすでに知っていて、もっと最先端の話が聞きたかった、また推進員の具体的な行動指針を示してほしいとあります。

推進員の活動としては「サスティナブル・フォーラムわかやま（通称・SFわかやま）」のメンバーとして毎月の会議等に出席、また今年の「おもしろ環

境まつり2018」では子供たちとのふれあいが楽しかったといいます。

私生活では、片道15^分の通勤を自転車で（雨の日はバイク利用）、夏はクーラーをつけない（妻が「暑い！」と怒る）、暖房はジャンパーを着て16℃設定、そして家族はいつも居間に集まっていることが多く、風呂も続けて入るといいます。その順番は、娘→夫→長男→妻と決まっているそうです。またマイバッグやマイカップも利用しています。今年の「クールチョイスコンクール」には節電ができなかったことで参加していませんが、一昨年には梅ジュースを獲得しています。

そして職場では「省エネマン」と呼ばれ、消費電力量の多い水銀灯約300灯を通常は使用しない、蛍光灯も300灯以上をタイマー設定、6か所のトイレは人感センサー、場内の排気ファン26個も間欠運転で半分の稼働にしたそうです。

水流さんは、CO₂削減に家庭・職場で頑張っているが周りにあまり理解してもらえないことが残念！とあります。また地球規模の人口増加に、温暖化による危機感を深く感じるともいいます。そして子供たちを集めて温暖化の講義をやりたいとも。

この日の最高気温は7℃未満、水流さんはその数キロの道のりをバイクでやってきて、帰って行かれました。

なるほどザ・ワード

STOP温暖化・焦点の言葉 28

*地球温暖化をめぐる報道などで、いま焦点となっている言葉を簡単に解説します

「エシカル〇〇」とは

最近、「エシカル〇〇」という言葉を耳にするようになりました。エシカル（ethical）とは「倫理的な」とか「道徳的な」という意味です。〇〇にはいろいろな言葉が入りますが、例えば、「エシカルコンシューマー（消費者）」だと、「自然、環境、人や社会に配慮した工程、流通で製造された商品を選択し、そうでないものを選択しない」という志向を持った消費者という意味になります。「エシカルファッション」では、素材にオーガニックコットンや天然染料を使う、毛皮や皮は食肉用の副産物を利用する、製造や流過程においても公正が保たれ、さらにこれらの持続可能性も

観点に入っています。このように見ると、エシカルなものを選択・購入するエシカル消費は、前号で解説した「SDGs（エスディージーズ）」の具体的な行動のひとつ、ということにもなります。

最も身近ですぐにでも始められるエシカル消費と言えば、食と農の分野で、有機栽培や循環型農業で生産された農産物の地産地消となるでしょう。ちなみに和歌山では、地球温暖化防止活動推進センターを運営している「わかやま環境ネットワーク（WeNET）」と事務所をともにする「和歌山有機認証協会（WOCA）」が、食と農のエシカル消費を支える様々な認証業務や活動を行っています。

イベント情報

◆紀州九度山 真田まつり

2019年5月4日(土)

場所：道の駅「柿の郷くどやま」芝生広場
〒648-0161
和歌山県伊都郡九度山町入郷5番5

主催：九度山町真田まつり実行委員会

出展：伊都・橋本地球温暖化対策協議会

内容：地球温暖化防止啓発、
自然素材のクラフト教室

＜アースデイ情報＞

◆ハッピーアースデイ大阪

2019年3月23日(土) 24日(日)

場所：大阪府営 久宝寺緑地 修景広場周辺
(〒581-0077 大阪府八尾市西久宝寺323)
主催：ハッピーアースデイ大阪実行委員会
<http://www.happy-earthday-osaka.jp>

◆アースデイ神戸

2019年5月4日(土) 5日(日)

場所：みなとのもり公園(神戸震災復興記念公園)
(神戸市中央区小野浜)
ポートライナー「貿易センター駅」より
徒歩2分、各線「三宮駅」より徒歩10分
主催：アースデイ神戸2019実行委員会
<http://earthdaykobe.com>

あなたの活動をサポート！ わかやま推進員サイト

進員活動に必要な情報が揃っています。

◆推進員活動カレンダー

県内で開催するイベントや学習会などのお知らせをチェックできます。

◆各種提出書類(様式)

推進員活動を県に報告するための各種様式をダウンロードできます。

◆貸出しアイテム

イベント出展や学習会などで使えるツールの貸出リストを見ることが出来ます。

◆資料・データ集

これまでに取得したアンケートや診

断結果、パンフレットや冊子などはこちら。

◆リンク

地球温暖化やエネルギーなどの専門分野、学習イベントのお役立ちサイトが満載。

◆掲示板

推進員さん同士でさまざまな意見交換や、地域イベント案内など。

ぜひ、パソコンやスマートフォンにお気に入り登録をして活用してください。



あなたの活動をサポート わかやま推進員サイト **わかやま 推進員** **検索** イベント情報も随時更新

県センター通信

今年度を振り返ると、さまざまな出会いがありました。日常の変化を敏感に感じ取った人々がイベントや講座を訪れ「自分に何が出来るだろうか」を考える機会を持ち帰った1年でした。特に印象的だったのが、本誌vol.30(2018秋号)で紹介した昨年8月開催の防災+推進員養成講座でした。親子で参加してくれた小学4年の男の子が、防災食の試食中に様々な質問をしてくれました。「台風はなぜ大きくなるの?」「温暖化はどうやれば止められるの?」食事もそこそこに湧き出てくる疑問の数々。私は全てを教えず、ヒントを出しながら家に帰ってぜひ調べてみてほしいことを伝えました。しばらくたったある日、お母さんから1通のメールが。そこには、温暖化と自然災害についての自由研究を学校に提出したとの報告が。避難場所までのハザードマップを作ったり、防災川柳を考えたり。少し難しいテーマだったが親子で防災と温暖化防止の意識が高まったという内容でした。世界的な会議も、地域のイベントもすべては「顔の見える対話から」。これからも歩みを止めることなく丁寧な対話の機会を作っていきたいと実感した出来事でした。(事務局長 白井 達也)

